

仲間

途中で食べた御馳走よりも  
途中で眺めた景色よりも  
旅のよしあしは道連れで決まる

一人旅は限りなく不安  
気の合わない人との旅は辛い

気の合う仲間  
心の通う人間集団  
人生のよい道連れをつくろう

ホンネ ……?

キョウカン ……?

ナカマ ……?

……………?

アマイ!

ニンゲン ショセンハヒトリナノサ

そう!

所詮は一人で死んでいくのだから  
せめて生きている間は  
生涯学習集団をつくっていこう  
死もまた味わいつくすべく

## 生涯学習集団——人生の道連れ——づくり

人は誰でも仲よし仲間をもって居る。気の合う仲間が自然に集まっている集団である。これは「心の通う人間集団とは」で挙げた四つの機能をもっているか、その「芽」ぐらいいはもっている。芽は育てなければ大きくならず、玉は磨かなければ光らない。せっかくの仲間だから、ただの気ままな仲間、気紛れ集団で終わらせてしまうのはもったいないことだ。

- (1) 死ぬまでつき合う仲間、人生という旅の道連れとして、生涯学習集団に転成させていきたいものだ。「死ぬまでつき合う仲間になろう」と貴方が呼びかけて、みんなで確認してもらえばよい。一寸ばかり照れくさいのを我慢するだけのことである。
  - (2) しょっちゅう顔を合わせているにしても、月に一度は改めて集まろう。年をとったら毎週でも、毎日でもかまわない。
  - (イ) 飲食を共にし、何でも語り合う。人間関係の深さは、交わした言葉の数に比例する。
  - (ロ) 共同のプロジェクト（大小、種類、何でもよい）を持つ。何かみんなで企てて、成功したときの喜びを共有することは素晴らしい。
  - (ハ) そのときどきの「暗い感情」をさらけ出して、本当の原因をつきとめ、解決すべきテーマを設定し、解決していく。これを学習という。
  - (3) 人数は十人前後、またはそれ以下であろう。
- (1) 貴方はいい仲間の中で解放され、活きいきした、自由な人にな

## 生涯学習集団をつくることの意義

(1) 貴方はいい仲間の中で解放され、活きいきした、自由な人にな

- るでしょう。
- (2) 貴方が自由で活きいきしているから、貴方に接する人々は何となく解放されて、活きいきしてくるでしょう。貴方は社会の活性化に役立つ人になっているでしょう。
- (3) 本音でものをいえる人になりますから、貴方の所属している大きな組織（職場、組合、商工会、教団、政党、各種団体等）の中でも素直にものがいえ、勝れた批判者、提言者になって、民主主義五〇年の経過の中ですっかり動脈硬化症になっている大きな組織に活力を蘇らせる力になるでしょう。
- (4) 貴方や、貴方の仲間が暗い感情に陥ったとき、本音が通用している仲間達は、暗い感情の本当の原因をみつけ出し、解決すべきテーマを明確に設定する能力を発揮するでしょう。解決の方法は貴方の手の届くところまで近づくはずですが、また仲間達は力をかしてくるでしょう。貴方は暗い感情から逃げようとして、我慢したりすることなく、積極的に対処して、明るい感情を手にする人になるでしょう。
- (5) 貴方は、人の暗い感情の本当の原因を推察できる人になっているでしょう。人の問題解決に一寸した力をかすことのできる、優しい人間になっているでしょう。
- (6) 人の喜びや悲しみを共感し合うことのできる貴方は、喜びのときも、悲しみのときも、幸せを感謝することができる人になっているでしょう。
- (7) 活きいきした地域には必ず優れた学習集団がある。逆にいえば、一つの優れた学習集団があれば地域は活性化するともいえる。

## 第四章 あとがきに代えて

かつて八十二銀行の経済研究所が出していた経済月報という雑誌に連載した『村づくり、人づくり、物づくり』の中の一編を転載してあとがきに代えようと思う。

### 生涯学習集団

#### ——心の通う人間集団づくり——

「暗い感情は学習の元手であり、技術の母だ」、といった。「学習は個人の暗い感情から出発する」、ともいった。

今、地域では、人々の職業が多様化し、隣は何をする人ぞ、という状態である。職場では組織化、管理化が進み、人間疎外が進む。各種団体（商工会、PTA、組合、教団、政党から婦人会、老人クラブ等まで）も目的別に多様化し、建前集団になり、全人的なつき合いからはおよそ遠い。人間疎外は「豊かな社会の中での暗い感情」といえよう。

学習の時代、学習社会の形成、というからには、まず第一に、その問題に対する処方箋を書かなければならない。

#### 心の通う人間集団とは

(1) 本音が通用している集団——誰かが建前でものをいうと、みんながニヤニヤ笑う。すると本人もたちまち自己嫌悪に陥って、本音を出さなくてはいられなくなってしまう。人をして本音を

出さずにはいられなくしてしまう、という機能をもつ集団（機能(1)）。

(2) 何を話してもよい仲間——オールラウンドでつき合える仲間。目的集団ではないから、してはならない話とか、してはならないこと、などというタブーはない。噂話、悪口OK、政治の話、行政、会社、教団、政党、所属団体の批判結構。活いきした批判や意見が自由に飛び交うから、これらに耳を傾ければ、どんなアンケートよりも正確な情報が得られる。（機能(2)）

(3) 各自の個性が相互に確認されている。したがって、集団の中でそれぞれの個性に応じた役割が暗黙のうちに決まっている。個性に合った役割だから無理がない。リーダー役は自然に決まるが、相互関係は全く平等である。人柄を通して結合している集団だから、喜びも悲しみも共感できる関係が成立している。喜びは増幅され、悲しみは和らげられる。（機能(3)）

(4) その中にいると「解放されているな」と感じられる集団。人生を航海にたとえるなら、母なる港。人生の母港。大きな組織（会社、官庁、団体等）で傷ついて帰ってきてても、この小集団で傷をさらけ出すと、仲間に慰められて、たちまち傷はいえ、再び元気を取り戻して、社会に立ち向う元気を与えてくれる集団（機能(4)）

こんな集団、仲間をもった人生を、「幸福な人生」というのだらう。

## (2) 快適空間づくりのために

楽習会の司会者や、楽習会のファシリテーターが、例えば験の裏に残っている快い思い出、或いは舌の記憶に残っている快い思い出を、まず自分の思い出として語り始める。すると、それが糸口になって、参加者が口々に自分の眼や舌に関わる思い出を語り出す。司会者やファシリテーターはそれを快適空間づくりに結びつけてゆく手がかりにする。

この表はそのためを使って頂ければ、と違って作ったものであり、私自身としてもいくらかの効果を上げた経験をもっている。

◎ 左の大枝に『心の癒し』が配されている。それは『暗い感情に対処』、という項に対応する。

“生きていく苦しみ” “老いてゆく淋しさ” “病むつらさ” “死の悲しみ” などにどう対処するか。

また、“愛する者との別れの悲しみ” “憎らしい奴と付き合い合わなければならぬつらさ” “求めても得られない苦しみ” “あらゆる憂いや悲しみ” にどう対処していくか、ということになるのだが、『そんなものは個々の心の中の問題で、むらづくり、まちづくりには何の関係もないことだ』と言ってしまってもよいものだろうか。

宗教が生きていた時代には、それは宗教家の領分であったのだが、今、地域には大きな寺やお社があるばかり。

また、公民館、社会教育はこれに代えてくれるだろうか。

これらの問題にもろに対応してくれる人は少ない。オカルト教団などが人を引きつけるのも由なしとしない。

とは言っても、人間がこれらの暗い感情から解放された訳では

なく、むしろ苦しみはますます深くなっているとさえ言える。

私は先に、“キャリアアスクール、またの名を大人の学校、またの名を生涯楽習集団” などという提案をしてきたが、何でも話し合える仲間を作って生きていこう、という提案はこれに対応する。

地域づくりは仲間づくり、と言ってもよい程重要なことだと思っている。

幸福の原点がそこにあるからである。

(生涯学習)  
Life long learning

快適空間づくりのために  
for creating comfortable environment

風土舎 (Fudōsha)

	眼 Eyes 視覚 sight	耳 Ears 聴覚 hearing	鼻 Nose 嗅覚 smell	舌 Tongue 味覚 taste	身 Body 触覚 touch	意 Consciousness 心 mind
良 い 思 い 出 Pleasant Memory						
悪 い 思 い 出 Unpleasant Memory						

心の荒廃は目をおおえばかり、環境の破壊が進み、日本は公害列島といわれ、地球全体が悲鳴を上げている。次世代の者達が健康に、幸福に生きていけるだろうか、という危惧さえ現実のものになってきた。

補助金をもらって、競って温泉を掘ったり、観光開発を企てたりすることが地域の活性化だ、むらづくりだなどと思いきんではいけない時代なのである。

そういうことから、傷付いた心や体を元へ戻し、快適な空間をつくり出していく、という考えを中心に据えたのである。

激しい競争の時代はまだ続いているが、直接「幸福」を求める共生の世紀を、自分の生きている地域の上に展望しよう、という訳である。

『幸福とは何か』、を定義することはむずかしいが、幸福のある場所だけは分かった。それは人間関係の中にしかない、と哲学者坂本博氏が教えてくれた。

◎ この図の地下下に描かれている『学習の喜び』、『協力の喜び』、『企ての喜び』、『実践の喜び』、『成就の喜び』、とあるのは、地域の人々の人間関係の中でこそ得られるものである。地面の下に隠れている根から喜びという豊富な水や養分が上っていきむらづくり、まちづくりでなければ本物ではない。

これが逆だと、『教育される苦しみ』、『協力させられる苦しみ』、『人の企てにのせられる面白くないさ』、『実践にかり出される辛さ』、『成就しても残る空しさ』、ということになって、喜びの樹液は上っていかない。せっかく作ったものも実らずに落果してしまったりする（つくったきり誰もいらない美術館や博物館、赤字

続きの温泉施設、基盤整備したきり耕作放棄されてしまった農地、などなどを見ればそれが分かる。

◎ 右の大枝、『体の癒し』に、上部に掲げた『明るい環境の創造』が対応する。

環境の明るさ、暗さは五感を通して入ってくる刺激を受容して、心が快、不快を判断する。今までにやられてきた、花づくり、公園づくり、味づくり、特産品開発、直売所、産直運動等々も、このようにして位置づけてみる必要がある。

そこから何をしたらよいか、という工夫も湧くというものである。

地域活性化委員会、むらづくり委員会などで話し合いが行われる場合、まず行政からの伝達が終わると、後は意見交換ということになるが、多くの場合、思いつきや思い出話が中心になり、なかなか焦点が合わない。

また有志の楽習会などでも話が散漫になって、中心課題がみつからず、ファシリテーターが悩むことが多い。そういうときの参考に、とって作った表があるので、次に掲げる。

### 第三章 キャリアスクールは地域に根ざす学習会

(1) むら・まちづくり曼陀羅 (MANDALA) について

住民主動の地域づくり、と言われ始めてからすでに長い年月がたっている。しかし、明治以来百数十年も行政主導の近代化を進めてきた我が国にあっては、その体質を変えることは容易でない。どうしても補助金誘導型の、従って行政主導型のむらづくり、まちづくりから抜け切れないでいる、というのが大勢のようである。

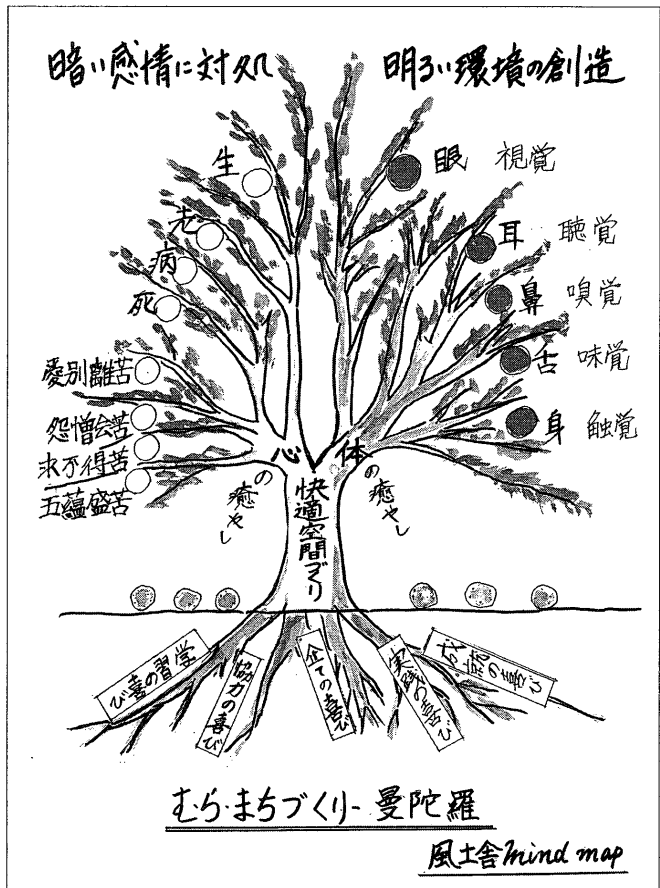
補助金を出すところは行政であり、本体は霞が関の中央省庁である。行政は縦割りになっていて、それが県、市町村、集落に到るまで縦割り行政の網の目に組み込まれている。上から下りてくる施策もまた縦割り行政の網の目に従って下りてくるから、一般の住民には全体像がつかみにくく、自分の頭の中に描き出すのがむずかしい。

そこに暮らす一人の人間として、むら・まちづくりを考えるときに、どんな全体像を思い浮かべて考えたらよいかをおもんばかって描いたのが「むら・まちづくり曼陀羅」である。

曼陀羅というのはいかにも老人らしく、まっ香臭いと言う若者がいたので、では「むら・まちづくりホロニクス」ではどうか、と言ったらなお分らない、と言った。そこで、一つが全体につながり、全体が一つに集約される、というような意味で、「むら・まちづくり曼陀羅」と呼ぶことにした。

中心にすえるイメージは『快適空間づくり』とした。  
左右二つの大枝に体の癒し、心の癒しを配した。  
癒す、という言葉には、傷ついた心や体を元の状態に戻す、とい

キャリアスクール



う意味がある。

人生に求むべき価値があるとするとするなら、自由（主として経済、即ち金）と栄光（地位や名声）と幸福の三つだといわれる。二十世紀は国家、社会も、個人も、金や名声を求めて激しく競り合う競争の時代であった。「お受験戦争」という言葉があるくらい、それは生後間もなくから始まる激しいものであった。

経済的に豊かになれば、また社会的地位が上げれば幸福はそれについてくるものだと思われていたからであろう。  
だが幸福はついてこなかった。  
たしかに経済的には豊かになり、生活は便利になった。だが、人

④ 楽しくなかったら止めて、組みなおしをする。

これは初めからそうしておいたらよいと思う。なかなかむずかしいことであるから、最初に呼びかけるときに“この指止まれ”方式にして、気の合ったものが集まるのがよく、人数の多いのを望まないことである。

⑤ グループが自走できるまで、また時に応じてファシリテーターの応援を求める

先輩グループは要請に応じて、適当な人を送る。

(5) 誰が、何処でと問われたら

① やるのは自分

もっと前むきに、もっと生きいきと、もっと創造的に生きていきたいと思った人が呼び掛け人になるほかない。また呼び掛けに応じるかどうかも自分で決める他ない。

② 貴方が呼び掛けて集まってくる範囲

三人でもよく、五人でもよく、十人ぐらいが理想かもしれない。

大勢過ぎたら分割するがよい。集落か、旧町村ぐらいな範囲と考えるがよい。

③ 人が集まる場所さえあればどこでもよい

今はどこでも空いている場所がある。またそのために法的規

制を受けない九・九m<sup>2</sup>の隠れ家のようなものを作った者もある。

④ 連絡のための事務局

私の場合、当面松本大学の地域総合研究センターにおかせてもらうことにしている。

⑤ 年に一度ぐらいは各地のグループの交流会をやる

連絡のための事務局も松本大学に依頼しようと思っている。



③ みんなで何かを企て、協力して実践し、成就の喜びを共有する  
これは有形の置き土産になる。

④ ときに沁みじみ楽習旅行などを  
新しい経験は楽しく、またものを感じ、考え、やる気をおこさせるものである。

⑤ 他の仲間達との交流  
ヒューマンネットワーク作り。交流は互いに刺戟し合うことにより、仲間の活性化に役立つ。また問題解決能力が何倍かに向上する。

⑥ 人生という旅の道連れをつくって生きていく、という自覚  
よくても悪くても、これが自分の人生の道連れなんだなあ、  
と思えるような仲間づくり。(巻末の『生涯楽習集団』——心の通う人間集団づくり——参照)

⑦ 以上のような楽習(学習)を通して  
◎ 何をやるのか——問題の発見  
◎ どのようにやるのか——方法の発見  
◎ 誰がやるのか——やるのは自分だ、ということの発見  
などを学ぶ楽しさ、面白さを知る。

⑧ ファシリテーターの養成

(4) 学習を、楽しく学ぶ「楽習」にする。そういう役割を果たせるような人が育ってゆく。また育ててゆく。

(4) どのようにやるのか、と問われれば

① 理想的には月に一度の楽習会を持つ  
開催日を決めておくのがよい。  
昔、「見ざる、聞かざる、言わざる」といって、言論の規制が厳しかった時代でも、六十日に一度廻ってくる庚申の日を仲良し仲間(庚申仲間といった)が寄って、自由におしゃべりしてもよいという解放の日としていた。規制だけでは人間が生きていけないということを、支配する側も知っていたのである。

② 飲食は簡素に  
やってみて思うことは飲食が重くなっていくことである。これは初めから簡素なものにして、用意する人、食べる人が気持ちを散乱させないように工夫しておくことが大切である。できれば「楽習会メニュー」を決めておくのがよいと思われる。

③ 集まるごとにメモを残す  
これもわざわざわしくないように、例えば  
◎ 生涯学習カード、ムトス・ノート一枚でもよく  
◎ マインドマップをつくってもよく  
◎ 工夫した料理のレシピ一枚でもよく  
◎ 地域づくりへの提案、或いはちょっとした実践記録の一つでもよい。

断するのが私という個人で、客観性がないからそう言われたのだろう、と思ったが、他にないなら不完全であってもこれでもいい、と思っている。

⑤ 生きた証しを残すために

そうは言ってみても、『何も残す必要はない』と言われればそれまでだが、それでも何か少しばかりは残していきたい。意識して残したいと思う。

おきみやげ (Parting sent) という言葉があるではないか。

⑥ 沁みじみと生きるために

物はなくても、心豊かに生きたいもの。

(3) 何をやるのか、と問われれば

① 楽しい話し合い

人間の頭の中には一兆個を越える脳細胞があるといわれる。優れたバイオコンピュータといってもよい。性能はスーパーコンピュータを何倍も上回るものだという。また、口という優れたスピーカーが付いていて、耳という優れたレシーバーが付いている。頭蓋骨の中に納まるコンパクトなものであり、持ち運び自由なポータブルコンピュータである。しかも電源はいらず、どこでも、いつでも使える。

二人集まれば二台、五人、十人集まれば五十台のスーパーコンピュータを連結したようなものであり、会話はコードなしに、直ちに情報が交流する。

自然にまかせてのおしゃべりが大切。ならし運転、アイドリ  
ングのようなものである。

② 中心課題を拾い上げる

雑談といっても、人は自分の関心事について話すに決まっているから、気がついた者がそれを中心課題の一つとして取り上げる。話の内容の大事なところはメモして残す。できればマインドマップを作っていく。

メモやマインドマップは学習の成果として残るものであり、私はこれを「卵」と呼ぶ。学習会には必ずいくつかの「卵」を産んでいくように、ということを共通認識にしておこう。特にそういう役割を演ずる人をファシリテーター (Facilitator) という。

大きな卵を産もうとしてもだめ。小さく、産み易くして産むことである。虫の卵ぐらいなものでもよく、チャボの卵ぐらいでもよく、産み馴れてくると駝鳥の卵のようなものでも産めるようになる。

これが学習仲間 (学習集団) の成長であり、産んだ卵のわず  
かすが有形無形の置き土産ということになる。

産み易くして産む、やり易くしてやる。これがファシリテーターの役割である。

注意しなければならないのは、簡単なことをむずかしい問題に仕立てて、結局やらない方向にもって行ってしまっている人があることである。

## 第二章 キャリアスクール（仮称）の構想について

(1) キャリアスクール（仮称）の創立宣言という、いささか大袈裟なアップीलを書いてから四ヶ月ほどして、今度は考えに考えてその概念図を書き、二〇〇二年の年賀状とともに同じ人達に送った。

長い間私のやってきたことを知っている人達、私の性癖を知りほどの人達にである。

(2) 何でやるのか、と問われれば

① 生きいきと生きるために

ゲータは、『生きている限り生きいきと生きよ』、と言った。生きいきと生きる、ということとは明るい感情をもって生きる、ということであろう。明るい感情をもって生きるということは、暗い感情にどう対処するか、ということになるだろう。

② 暗い感情から抜け出すために

ものごとがうまくいっているときの明るい感情に対して、うまくいかないときに陥るあの暗い感情、招かざる客。そこから抜け出して明るい感情を手にするための努力と企てを技術と呼ぼう。学習の自身の大部分は技術。それを楽しみながら学ぶ。それで楽習会という。

易しいことにむずかしい理屈をつけてやらないでおこうとい

う学習会もあるが、むずかしいことをやり易くしてやってしまいう『楽習会』もある。

③ 幸福を求めて

幸福を定義することはできなかったが、幸福のありかだけは分かったような気がします、幸福は人と人との関係の中にかありません、と、哲学者 坂本博氏は言った。

幸福を求める、ということは、豊かな人間関係を求めることと同じではないか、と私は考えた。楽習集団づくり、というのは、まさにそれを目的にしているもの、と思う。

④ 善とは何か、を求めて

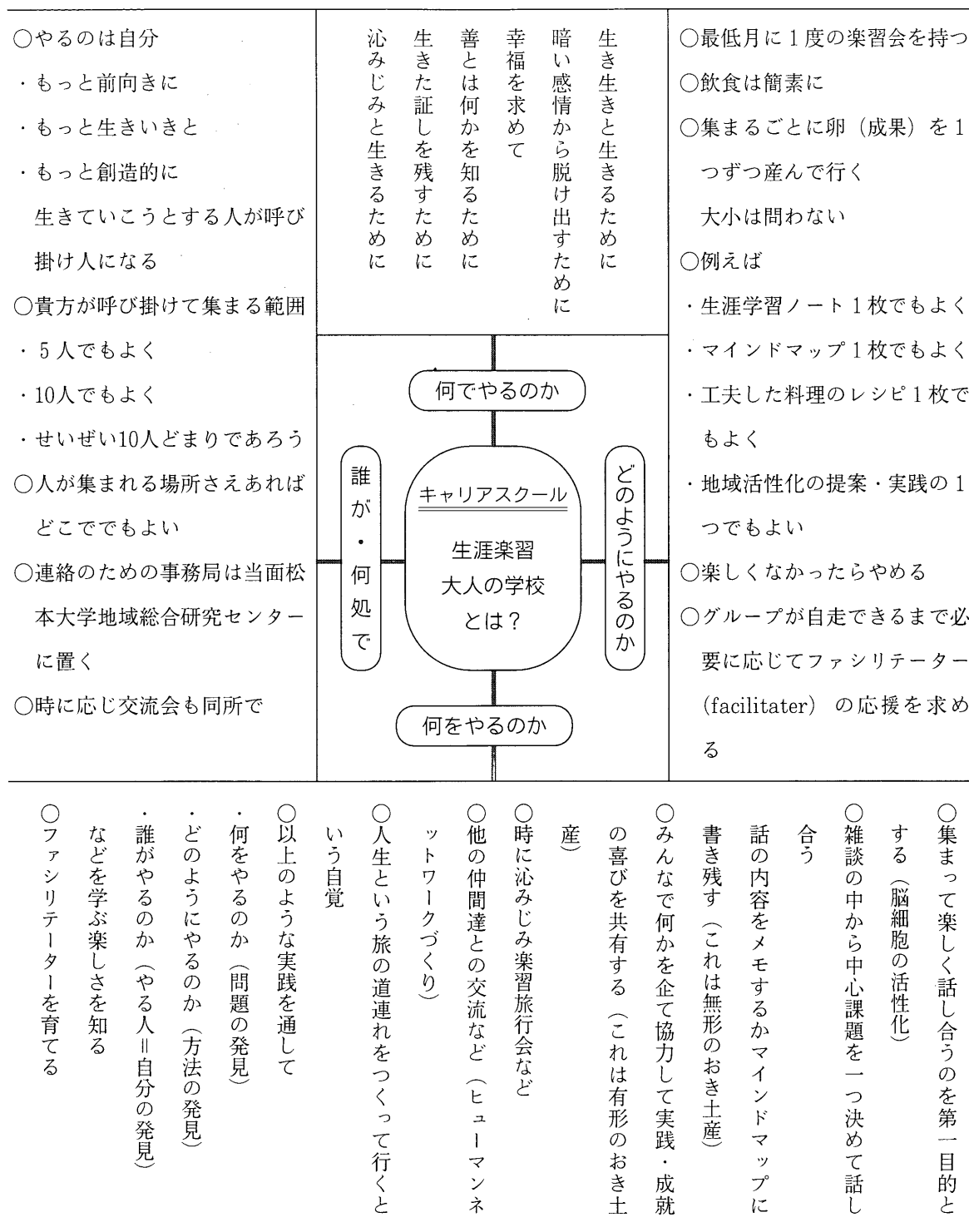
この歳になって、悪いことはできるだけしたくない、と思う。では善とは何か？

西田幾太郎先生の、あの有名な『善の研究』を読んでみても、『善とは何か』がはっきり分からなかった。何もしなければそれでよいのだが、何かをしようとするという訳にはいかなくなる。そこで、私は私の物差しを作ってみた。それは

『子や孫達、つまり次の世代の者達が生きていくのに好都合なことは善、不都合なことは悪』、と。

果たしてこれでよいのかどうか、倫理学の先生に尋ねてみたら、『おおよそよらしいと思います』、と言われた。そこで『どこが悪いところがあったら教えて下さい』と言うと、『分かりません』といわれた。多分子孫のために好都合か不都合かを判

キャリアスクールの概念図



自己活性化の訓練だ  
テキストは『自己活性化の実験』  
『生涯学習ノート』

第三に  
経験を後世に遺そう 置土産 (parting present)  
見本は既にできている  
『老人たちのおきみやげ』

第四に  
バイオコンピューターが描いた  
快適空間づくり曼陀羅 (mandala) の  
無限の探究と実践

第五には  
問題解決のためのネットワーク  
ヒューマンネットワークの構築だ  
IT革命は若者に任せて

大言壮語はしてみても 年は年  
などとビビルな 各々方  
人生すべて途中まで  
行けるところまで行ってみよう  
“老いて学ばば死して朽ちず”  
と佐藤一斉先生が言った

キャリアアスクール

朽ちざるものを遺していこう  
校舎もいらず  
設備もいらず  
予算もいらず  
みんなどこかに寄生する  
公共投資の夢の跡  
遊休施設は山のように

add aging から career へ  
自覚した者が互いに教師  
career school の開校だ

まずは 信州松本  
松本大学の軒下を借りて  
キャリアアスクールを開校する

二〇〇一・八・一六  
玉井 袈裟男

二〇〇一年盛夏・真昼の夢  
キャリアスクール創立宣言

我々は

ただ年をとっただけです aging

いたずらに馬齢を重ねて add aging

などと言ってはいるが

考えてもみよう 各々方

我々は

己が責任において飯を食い

結婚しては子を産み育て

真っ当に社会的責任を果たしてきたではないか

激動の二十世紀を生き抜いて

今もこうして生きている

してみれば 各々方

我等はまさに稀有なキャリア

御納得頂けますか 各々方

要領よく出世をしたり

ゴマゴマして金持ちになったりした者だけが

キャリアではありません

add aging (加齢) を career (経歴) に

まずは言葉で言ってみよう

「我等は人生のキャリアだ！」

言葉につれて意識を変えよう

キャリアとしての自己の発見！

さあそれで 何をやるのか

何をやるのか 寄っといで

寄っおいでよ 男も女も

キャリアスクールの開校だ！

第一には

白髪頭の中にある

己がバイオコンピューターの価値の自覚だ

一兆個はあるといわれる脳細胞は

大半眠っているのだが

呼べば答えて眼を覚ます

語れ！ 語れ！ 集まって語れ！

なんでも語れ！

思い出を語れ！

思いつきを語れ！

中心課題を探して語れ！

語ればコンピューターが記録する

第二には

## キャリア達へのアツピール

黙って死んじまう手はなからうよ  
各々方

ゲートボールに 温泉旅行に  
いい時代だなア

ありがたい御時世だよオ

なんぞと言っちゃアいるけど

極楽トンボじゃあるめえし

これでいいたア 思っちゃいねエ

俺達ア 滑り込みセーフだが

子や孫達はどうなるぞら

お年寄り

余計なことを考えず

一日一日楽しく豊かに

などと言われちゃアいるけれど

日本が亡びるかもしれねエって時に

楽しく豊かにもあるもんか

黙って死んじまう手はなからうよ  
各々方

二十世紀を生き抜いた我等は戦士

キャリアスクール

稀有なキャリアを持ったまま

灰になっちまうわけにいかねずら

今 日本は大ピンチ

後の世代に語り伝えよ

永続可能な生活文化を

自給可能な生産技術を

楽しく豊かな老後をなどと

おためごかしの老人福祉に

鼻毛を抜かれちゃいけないよ

横になるまで我等は強者だ

続いて次のような『キャリアスクール創立宣言』という威勢のいい宣言文を書いた。自分の歳を考えて、少し恥かしく、照れ隠しに「二〇〇一年盛夏・真夏の夢」という見出しを付けた。そして、この二部を親しい人々への暑中見舞いに同封した。

これは、発明を構成しないような、小さな小さな工夫である。このあとはまだまだ工夫を重ねなければならぬ、原理だけの発明であった。しかし、『これであるバカバカしい労働から解放される』という喜びは、まさに発明者の喜びであった。

豚も学習した。

私も学習した。

豚も私も喜びにみたされた。

### 地域づくり——学習的手法

地域でも、会社でも、何かが始まるときは、一番先に気がついたり、始めたりする人がいるものである。その人個人の暗い感情がバネになっているように思う。ところが、他の人にも同じような暗い感情があって、そこから脱け出したいと考えている共通の基盤があるから、それに触発されて何かが始まるのである。

個人の暗い感情を基盤にしないで、村のため、会社のためなどというのは、どこかに無理があって、盛り上がりのエネルギーに欠け、通り一ペンのものになってしまふことが多いようにみうけられる。

同じ村づくり（例えば集落営農や特産物づくりなど）でも、住民が自分の問題としてやったものと、行政指導型、教育普及型のものでは、天と地ほど違うものである。

暗い感情は学習の元手であり、技術の母である。

暗い感情は個人の心の中に生まれる。

猿も豚もそうであったが、個人の暗い感情が、みんなの暗い感情につながっていたときに、一人の工夫や思いつきが、みんなの工夫や思いつきを触発して、いきいきした村づくりや会社づくりに発展

していくものようである。

行政的、教育的手法による地域づくりから、学習的手法による地域づくりが必要な時代になっているような気がする。

(9) 旧文部省によって、社会教育局が生涯学習局に変えられてからすでに一六年になる。この間に、いつでも、どこでも、だれでもという耳ざわりのよい言葉とともに、公民館はもちろん、民間のカルチャーセンターも豊富なメニューを揃えて、受講者を待っている。

今更キャリアスクールでもあるまい、という声に答えておかなければならない。

私がキャリアスクール（仮称）というものを頭の中に描いたのは、平成十三年八月、ある集会で高齢者福祉を説く行政マンと、それを聴いている大勢の高齢者を見て、76歳、まぎれもなく高齢者である私の心の中を、なにもものが、喚きながら駆け抜けていくのを感じたことによる。そこで、私は高齢者の誰にともなく、激しい筆致で一文を書いた。

それが次にかかげる「キャリア達へのアピール」である。



て、鉄製のストローを作った。豚舎の壁に穴をあけて、このパイプを通し、豚舎内に十センチ、廊下側に十センチ出るように固定した。廊下側のパイプにビニールホースをつけて、一端をバケツの水の中に入れた。豚舎の中の豚がパイプをくわえて吸えば水が出るようにしたのである。

水の入ったバケツが外にあるのだから、糞などが入ることはない、というわけである。

豚舎内に十頭の豚を入れて観察した。

豚はパイプを意識しない。もちろん吸うはずもない。豚は乾いたエサを食うからのどが乾く。けれども水がない。

頭合をみはからってパイプから水をたらしてやると、豚はすぐに水をつつけ、パイプのそばに群がり、水がそこにあることを認識する。パイプをガリガリかじりはじめる。

私は用事があったので、人に観察を頼んで外出した。五時間後に帰ってきた。パイプから水を吸っているだろうという期待は見事にはずれ、飢えた豚が、眼を血走らせて、鉄パイプをかじっているだけだった。

「噛まないで吸うんだ。吸えッ！」と叫んでも言葉が通じない。

『吸う能力がないのかな？』

『そんなことはない。彼等も哺乳類だから吸う能力はあるはずだが、思い出せないでいるだけだ』

自問自答の末、思い出さないのであれば、思い出させる方法、これがテーマだ、と思った。

といっても、言葉が通じないから、教育はできない。みていると、或いは正面から、或いは横からパイプを深くくわえて噛んでいる。

そこでパイプを削って、長さを縮めていった。削って、削って、壁板から先端までの長さを二・五センチにまで削ったときに、驚くべきことが起こった。

一頭が突然ズズッと吸った。すると他の九頭も次つぎにズズッと吸ったのである。私の眼の前で、十頭の豚が、次つぎに噛まないで吸う方法を獲得していくのであった。

私は感動で言葉もなかった。

思うに、豚には巨大な鼻があり、頬のふくらみや唇の厚さがあって、パイプの先端が二・五センチまで削られると、歯が届かず、噛めなくなってしまう。噛まないで何かをすると、吹くか吸うかしかない。

人以外に、口で吹く動物を私は知らない。

吹けないとなると、あとは吸うしかない。

噛むことにこだわり続けた豚は、こだわりを捨てた（捨てさせられた）途端に吸うことを思い出し、一頭が吸った。状況は他の豚にとっても同じで、噛んでも噛んでも水が飲めず、のどが乾く一方という暗い感情が共通に蓄積されていたから、すぐに吸うことを覚えたのであろう。

この場合吸ったのが先か後かは偶然のことのように思われた。

私には、豚に吸わせてやろうという教育的意図があったが、言葉が通じないので、教育にはならなかった。噛むことに執着しているなら、噛めないようにと、二・五センチまで削っていった。吸うことを思い出せるような状況を作った、ということはいえる。しかし豚からみれば、求めても得られない暗い感情をバネに、自ら吸う方法を学習した、ということになる。

## 猿の学習、豚の学習と地域づくり

### 芋を洗って食う猿

幸島という島で猿の群れを観察していた研究者（川村氏）が、一九五三年夏、芋を川で洗って食うことを覚えた、一歳半の若い雌猿をみつけた。

土のついた芋を食っていた彼女の遊び仲間が、次つぎに芋を洗って食うことを学んでいく過程を、この研究者はじっと観察し続けた。猿達は、やがて芋を海水で洗って食うことを覚えた。

思うに、土つきの芋を食うと、口の中がジャリジャリして不愉快だったに違いない。洗って食うと、土がなくなり、海水で洗うと更にうすい塩味がついて、食べ易く、またうまかっただろう。

暗い感情から脱け出したのは、まさに彼女の学習であって、他からの教育によるものではない。他の猿がそれにならって、芋を洗って食うことを覚えていったのも、教育によったものではなくて、自ら学習したものと見える。

この場合、学習の下地になったのは、砂の上にバラ撒かれた芋が、ジャリジャリして食べにくいという、暗い感情が共通にあったということであり、その上で一匹の先駆的学習が次つぎに伝播していったということであろう。

面白いのは、芋洗いが遊び仲間の中に伝播したということであり、他の群れには伝播しにくいということである。また、それを覚えた猿の子供達は最初から芋を洗って食った、という報告がある。

身近な固体の仕ぐさを真似る、つまり学習によるものだと考えら

れたからである。

もし、この若い雌猿が大人になって子を生み、自分の子ばかりでなく、他の子猿達が土つきの芋を食って、ペットツバを吐いたりしているのを見て、『坊や、こっちへおいで。芋はこうやって、洗って食べるのよ』と教えたら、それは教育といえる。

初めに学習ありき、なのである。

学習して得たものを一般化して他に教える、それが教育である。もっとも、人間以外の動物で、意図的に他に教える、つまり教育することがあるかどうか、私は知らない。

### 豚はストローで水を飲むか。

私はかつて、豚舎の中で、ウォーターカップの中が糞やごみで汚れて、その掃除に難儀し、糞などの入らないウォーターカップはないか、と考えたことがある。

いろいろやってみたが、家畜はみな、上唇と下唇を共に水面下に没し、吸い上げるものであるから、ウォーターカップはどんな型のものであれ、一定以上の水面の広さと深さが欠かせないものであり、広さがあるから結局は異物が入ってしまうのであった。

あるとき、喫茶店でレモンスカッシュを飲みながら、『豚がストローで水を飲まないだろうか』と考えた。しかしすぐに、あのごつい鼻や口を想像して、とてもストローで水を飲むなどという芸当ができるはずはない、と思った。

何度も何度も考えたり打消したりしたが、それは頭の中でのこと、結局やってみる以外にないと考え、次のような実験装置を作った。

太さ二センチ、長さ三〇センチの鉄棒に、直径二ミリの穴をあけ

これは個人でやるか、少人数やるものです。問題が人によって異なるからです。

どんな問題がとび出すかわからない学習は、教育になれた人には何か厄介なことのようにみえるでしょう。そんなことをするよりも大勢を集めて、教本通りに教える方が性に合うと考えるのは当然かもしれません。

集まった人の人数が気になったら、それは教育。

人数が気にならなかつたら学習。

教育は、教える方も教わる方も若干の苦痛が伴う。

学習ははじめから終わりまで愉快なだけ。

予算でやるのが教育。

自分の金でやるのが学習。

建前でやるのが教育。

本音でやるのが学習。

教育は体制維持的に働き、

学習は体制批判的に働く。

学習という言葉は、戦後ずっと、革新陣営の人達が使ってきた言葉です。もっともこれは学習という名の教育であった、というむきがあります。教条主義とか、洗脳という言葉があったくらいで、明確な意図のもとに上からなされたものだからです。

日本では、体制側も、体制批判側も、よくよく教育偏重、学習軽視型が性に合っているようでありませぬ。

それが今は、文部省が、生涯教育といわないで、生涯学習といっているのです。私は疑い深い人間ですが、まずは歓迎することにしませう。というよりも、学習という建前が掲げられたのですから、

いった人の意図はどうであれ、学習をまともにとっていく立場を貫いていこう、という決意を新たにしたい、といった方がいかもありません。

私は学習を重視しますが、決して教育悪玉説をとっているわけではありません。

教育はいつの時代でも必要です。

学習は他の生物にもありますが、教育は人に固有のもののようにです。人は教育によって人間になります。正しい教育理念、明確な意図をもってなされるのが教育です。

戦後の混乱で、理念が不明確なまま、今日まで流されてきてしまったという不幸はありますが、これこそ、教育に関わる者自らが、学習によって確立していくべきことでしょう。

学習を大事にすればするほど、教育の重要性を痛感するのであります。

建前があつてこそその本音です。建前のない社会の本音などというものはナンセンスです。

そういえば、笑いは人間だけのものでした。

むずかしい顔をしてやるのが教育。

笑いながらするのが学習。

私は陸軍二等兵で敗戦を迎えました。教育によって与えられた価値観はガラガラと崩れてしまいました。軍隊では職業軍人が、学校では職業教師が、どんな心境であったかを知っております。

割腹して果てた軍人も、職を辞した教師も知っています。多くの人々は苦澁をのみこんで教師をやってきました。

そして私は、戦後の復興には、教育の現場で、一教師として参加してきたことになりました。

新しく与えられた理念は『民主主義』。公民館は青年団と婦人会を車の両輪とする民主主義の学校。

スローガンは『近代化合理化』という名の能率主義。

理念やスローガンは変わりましたが、官僚は健在でしたから、手法は行政指導型、教育普及型の近代化。

これも見事に成功して、こんどはわずか四〇年にして、世界の経済大国になってしまい、ロストウではないが、実に模範的な離陸と上昇でした。

### 病根と起死回生への願い

しかし、今、日本はどこか変です。

このまま高層を飛行できるのか。

金があるとはいえ、世界の非難を浴び、国民は国政に対して何となく無力になっている。

戦後教育によって与えられた民主主義は大丈夫か。

批判勢力は健全か。

トータルな国力は戦前のような、底の浅いものではないだろうか。

対外援助などと声高にいわれているが、ヒューマニズムは本物であらうか。

強大な行政と、教育によって、能率よくやってのける日本の近代化の手法を設計、構築してきた当の本人、日本の優れた官僚が、ひよっとしてその欠陥も一番よく知っているのではないか、と思われる節があります。

もし、おくれればせながら、国民の主體的な学習力に期待し、支援し、民度を高め、病根を断ち、土台から構築しなおそうと考えているのなら、これは素晴らしいことだと思おうのです。

そうあってほしいと痛切に思います。

私の耳に入ってくる批評や、教育関係者の対応が、今のまま、できるだけ変えないで、といっているようにみえるからおさらです。

戦後の教育界でも、学習に力点をおこうとする運動がありました。大正デモクラシーの中で、信州教育はその先端を行くものでした。

しかしそれはおしつづされて、一転、軍国主義に最も協力した教育に変身します。

戦後も、綴方教育や、歴史教育などにみるべきものがありました。高度成長の波におされて、影がうすくなっています。

教わったことを、まだ知らない大勢に向かって教えるのが一番楽しみです。

教わる方の面白くなさを別にすれば。

学習というのは面白いことです。

生産や生活の現場で、自分が当面する問題を自分でつかみ、自分でか、自分達でか、解決していくことです。その結果は喜びにみちたものであり、その過程も緊張感があって楽しいものです。

### 題名が変わった……果たして内容は

文部省の中の一番地味な社会教育局というのが、生涯学習局という名前に変わって、しかも筆頭局になったのは一九八八年のことです。お役所の機構いじりさ、とか、企業本位の人づくり政策さ、などという批判もありましたが、私には、それだけではない重大さがあるように思われました。

いや、そう思いたいと思った、というのが本当のところですよ。

妙法蓮華経とか、観無量寿経などというお経の題名は、全内容を一言でいい表しているというほど大事なものだといいますが、社会教育から生涯学習に、教育から学習に、題名が変わったのです。

教育とは、先生がいて、生徒がいて、上から下に教えるものです。主体は先生であって、生徒は客体であります。先生の方に『こんな人間にしたい』という教育理念があって、生徒をその方向へ導こうとするものです。

親を大切にしない、弱者を大切にしない、と教えるから、親孝行や、社会福祉を考える人間になるのです。他の動物にはないことです。

広辞苑には、『人間に他から意図をもって働きかけ、望ましい姿に変化させ、価値を実現する活動』とあります。

学習とは何か。

同じ広辞苑には、『過去の経験の上に立って、新しい知識や技術を習得すること』とあります。

今まで蓄積してきた経験を土台にして、自分がおかれている現実

に対処し、新しい対処の仕方（これこそ技術）を獲得して、これを経験の中にとりこみ、成長していく過程を学習というのでしよう。先生が主体で、生徒が客体、などというものではありません。

学習者が主体です。

同じ活動を、先生の側からみれば教育、生徒の側からみれば学習といってもかまいません。多くの教育関係者は、そのように解釈したがっているように見えます。それならば今までと変わりません。

変らない方がよいと思うのは人情ですが、私は少し違った見解をもっていきます。

### 戦前、戦後——違ふところと似たところ

なにしろ日本は、明治の初め、国民が自ら学習し、成長していくのに期待していたのでは、とても先進文明国に追いつくことはできない、と考えて、強大な政府と、皇国史観を基礎にした明確な意図をもつ教育によって急速な近代化を図ろうとし、ある意味においてそれに成功した国です。

国民は教育勅語を暗誦させられ、兵士は軍人に給わりたる勅諭を暗唱させられました。

私は今でも空でいえるほどです。

近代化のスローガンは殖産興業、富国強兵。

これは能率のよい方法でした。ですから、明治維新から七〇年たった頃には、世界の五大強国に列し、世界を相手に戦おうなどというまでになりました。

だが、戦ってみて判ったことは、トータルな国力の弱さでありました。

時の長野県社会福祉協議会長は黒田新一郎氏（元下諏訪町々長）であって、この人も八木林二氏と親交があった。その関係によってまだ52、53歳の私も県社協の老人大学立ち上げに関わることになった。黒田氏は謹厳な、近寄り難い人のように思えたが、氏の俳句

やわらかく炊けよ今年の手作麦

という一句に依って、私は氏に親近感を持ち、県老大設立に積極的に関わることになった。

これは後に長寿社会開発センターに引き継がれ、長野・松本など県下一〇ヶ所に開設され、後に、その上にシニアリーダー養成講座が設けられて今日に至っている。

県老大や、シニアリーダー養成講座は入学希望者が年々増加し、今や希望者全員を受け入れるのが困難なほど活況を呈している。そして今や80歳になった私も、いまだにその講師を勤めている。

それならば、いまだに高齢者の学習組織、キャリアスクールなどを考えなくてもよいではないか、と言われるだろう。

(8) それがそうはいかず、改めて学習運動に軸足をおくキャリアスクールの立ち上げを考えるようになったのは何故か、について答えなければならぬ。

それは平成十三年夏、自分も深く関わってきた県老大やシニアリーダー養成講座を振り返って、これらは生涯学習の一環として位置づけられてはいるものの、実質は行政によって計画、実施されている高齢者教育に他ならないこと、そしてその利点とともに如何とも越え難い限界があることを強く感じとったことである。

これは当然といえば当然なことであった。

学長は地方事務所長であり、クラス運営はその道のベテランである義務教育学校の校長経験者によって行われている。学生の自治会というものもあるが、それは学校の生徒会、あるいはクラス会のようなものである。

学生募集は高校の通学区と重なるような、郡、市単位に行われ、一〇〇名をこえるような多人数学級になっている。

講師も当局によって選任される。講師達は幾コマかの講義を任せられるが、講義内容については何の制約もなく、全く自由である。

この点は良いのだが、講義開始前の諸行事、例えば起立、礼、歌う歌（高野辰之の「ふる里」をはじめ小学校唱歌や「青い山脈」など）、それに終りの行事など、すべてを学級運営のベテラン達によって仕切られると、学生達の頭の中は昔の教室にいたときと同じように同一方向をむいて、まさに教育される者の姿勢になっているのである。

地域に於ける学習を一筋に、と思っただけでやってきた私には、一九八八年、旧文部省の機構改革によって社会教育局が廃止され、生涯学習局が新設された直後、教育と学習について所感を述べた何編かの文章があるが、その二つを転載することにしよう。

（何れも「風土舎」、私の私家本による）

いたい、それで自分がいなければ困るような仕掛けをつくり、『俺が面倒をみなければ、植木や盆栽に水やりをするものもない』などと言って、自分の存在を主張しているんでしょか」

55歳と45歳では、そして現役として忙しく生きている二人にはまだよく分らないところであったが、

「これは人事じゃないですよ。いずれ僕等も年をとる。八木さん、これは老人大学ですよ」

「玉井君、老人大学やりましょう。はや手廻しだが、早いにこしたことはない」

これがキャリアスクール発想のきっかけであった。

八木さんは当時県の厚生課長をやっていた石井健治郎氏と親交があった。石井氏を通して県下の老人クラブにアッピールし、その年昭和四十五年、多分九月十四、十五日、北安曇郡小谷村梅池高原にあった(財)農文協の梅池センターを会場に、第一回梅池老人大学が開かれた。

集まる者一〇〇余名、最高齢者86歳 米倉竜也氏(元全国農協中央会々長、元参議院議員)に学長を依頼したら「どうせ一回限りだろう。そんなのは嫌だよ。本当に毎年やるのならやってもいい」、と言われた。それで毎年やります、という約束で、米倉学長のもとに梅池老人大学が発足した。

今考えれば、それはまさにキャリアスクールの芽であった。

私には『老人の仕事と生き甲斐』という講義が割り振られ、45歳でそんな話ができるわけもなく、私の与えられた講義枠の中で、小林富雄先生にミニ盆栽の講義と実習をして頂いた。

多くの講義の中で、小林先生の講座が一番人気であり、小林先生

は盆栽の先生として、その後も県下各地へ出掛けられるようになった。

“たかが物、されど物、物を以て語れ!”というのが私の学習モットーの一つになった。

第一回梅池老人大学がきっかけになり、小谷村の老人達が民芸品作りを始めたり、大町市常盤の老人達が、国鉄常盤駅のホームに花壇作りを始めたり、各地に様々な動きが始まった。

明けて、昭和四十六年三月、大北農協管下の老人達の作品を集めて大北民芸展というものが開かれた。大北農協の広報課長をやっていた横沢馨氏が旧農文協の会員であり、八木氏や私の共通の友人であったことによる。

池田町公民館に集まった作品は約三〇〇〇点、ワラ細工だけでも三〇〇〇点を上廻るといふ盛況さであった。

この席で出会った横沢馨氏、日本農業新聞の前田誠記者、それに私、玉井によって、東京の子供を対象にした『夏休み子供村』が計画され、今日盛んに言われているグリーンツーリズムや食農教育に先鞭をつけることになったのは老人達の活動に刺戟されたことであつた。

梅池老人大学は(財)農文協の木谷尚史氏によって昭和六十二年まで一八年間続けられた。

#### (7) 長野県老人大学

梅池老人大学におくれること七年、昭和五十二年に、全国にさきがけて兵庫県の老人大学が開設され、更に一〜二年おくれて長野県老人大学が開かれる。

三年間育てた良苗が一本一二〜三円だというのに、はね出し苗を二年間育てれば一本五〇円で引き受けるというのだから、これは面白い、と思った。今日流に考えれば、これはまさにコミュニティビジネスに通じる。

それでこの話を栄村の旧農文協会員、樋口梅雄氏に話したところ、まわりの老人達が、そんな仕事は俺達年寄りにやらせろ、と言っているという。そして、ミニ盆栽の作り方を教えろと言っているというのであった。

次の機会に栄村へ行ったときに老人達と会うことになった。私はミニ盆栽の仕立てかたなど知らないものだから、帰りに老人達を須坂園芸高校まで連れて行って、小林富雄先生という、その道の専門家に引き合わせよう、と言ったのである。

前の晩学習会をやって、樋口氏宅に泊めてもらったのだが、朝、まだ私が寝ているうちに近所の老人達が三人、樋口家の囲爐裏に踏みこんで、大きな声で話しているのであった。

「いつまで寝てるんだらうなあ」

「早く起きてくれねえかなあ」、などと言っているのがかすかに聞こえた。

私、45歳、彼等は多分70代、そのうちの一人は樋口朝次郎という人だったことを覚えている。不思議な体験であった。

須坂園芸高校に小林先生を訪ねた。先生は非常に喜ばれ、『昔は土地の農家の人達が、何かにつけて農学校に相談に来てくれたものだが、今は訪れてくるものなんか一人もいない。先生、いい人達を連れてきて下さってありがとう』、と言われた。

老人達もミニ盆栽の現物を見せられ、作り方を教えてもらって大

感激であった。お礼を言って帰ろうとしたら、小林先生は『こんなことで驚いてはいけません。私の家へ行きましょう。私は定年までに一万鉢作って退職しようと考えたんです。一鉢一〇〇〇円はする本物の盆栽ですよ。年に一〇〇〇鉢ずつ売れば、一〇〇万円にはなる。年金なんかあてにしないで生きていけると考えたんです。是非見ていって下さい。』、と言われたのである。

先生のお宅へ行ってみて驚いた。青々としたリング園にリングが一つもなっていない。リングの樹は盆栽培養の日陰をつくっているだけで、その下に無数の鉢が置いてあった。先生の説明を聞いているうちに正午を過ぎてしまった。先生は親子丼をとって下さり、食べて行けと言われる。しかも帰りには三人にソテツの鉢をお土産に下さったのである。

老人達は大感激であった。

先生の喜ばれよう、老人達の感激のしよう、それを見て、私は今良いことをしているのだという喜びにみたされた。

私は老人達を国鉄豊野駅まで送り、その足で（財）農文協の事務所八木林二氏を訪ねた。そして、その日の老人達の興奮した様子を話し、

「八木さん、これは老人の学校をやるべきです。老人達の、あれ程の学習意欲を見たのは初めてです。人間、年をとるとむやみに柿や栗を植えたり、植木や盆栽に精を出したりするんですが、もう少し早く始めれば花も実も見れるのにねえ。なぜでしょうかねえ。」

八木氏55歳、私45歳の会話であった。

「子供が大きくなり、孫も手を離れ、誰も相手にしてくれるものがなくなつて淋しいんでしょうかねえ。人間、誰かに頼りにされて



号をもって廃刊せざるを得なくなった。

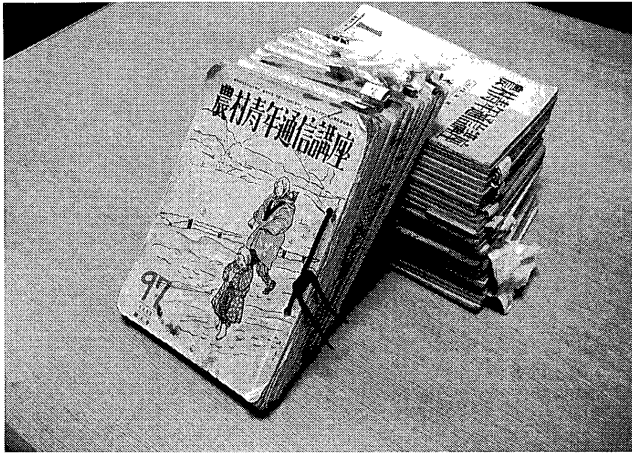
(社団法人) 長野県農村文化協会はここで消滅する。筆者は、最後の専従者小林元一氏(東大社会教育学科卒)とともにその見届人になった。

農村青年通信講座は最盛期公称五千部といわれたが、一冊を三人で廻し読みしていたなどという人も多かったから、二〇〇万国民の中でこの会員の占めた割合は驚異的に高いものと思われる。

昭和二〇年代から三〇年代にかけて、長野県の青年団活動は全国の最先端を走っていた。しかも県連合青年団の青年団問題研究会など集まる活動家達はほとんど農文協の会員という状況であった。

この人達が今、60代後半から70代の高齢期を生きているのである。

キャリアスクールの有力なメンバーとして期待する所以である。



農村青年通信講座 (注 よく学習された様子がしのばれる)

(5) 私が育てられた学習運動を主軸とする(社)農文協は昭和三十四年に消滅するが、それより前、昭和二十七年に経営方針をめぐる内部対立がおき、八木氏を中心にして、出版や文化活動に重心を移そうとする人達は新に(財団法人)長野県農村文化協会を設立した。これは、ある時代には活発に、ある時代には細々と、そして八木氏亡き後も今日まで命脈を保ってきた。(平成十六年三月三十一日をもって財団は消滅するが、有志組織として名称は残り、私もまたその会員に名を連ねている)

(6) 梅池老人大学開催のいきさつ(キャリアスクールの芽生え)

時代はとんで、昭和四十五年の春、私は栄村の旧農文協会員達(栄村農民研といっていた)に招かれて同村を訪れた。車を運転して山の中の道を行くと道路脇の畑で老夫婦が杉苗の植えかえ作業をしていた。冬季間、苗の芯が折れて、植林にむかなくなった不良苗が山程捨てられているのを見て、『それはどうするのですか?』と尋ねた。すると、『こんなのは売れないから枯らして燃してしまうだけだ』、という答えが返ってきた。『もったいないから私に分けて下さい』、と言うと、『分けるもなにも、みんな持って行ってくれ』、と言われた。私は一本一円か二円の金を置いて二〇〇本ほどもってきた。

松本への帰途、戸倉町羽尾の大谷惣重君という、これも旧農文協会員の家で一休みさせてもらいながら、芯折れ杉苗の話をする時、『玉井さん、これは面白いぜ。それを植えておいて、新芽が出たら摘み、また出たら摘んで、二年面倒をみるよ。ミニ盆栽だ。一本五〇円で引き受けてもいいぜ』、と言ったのである。

「そういうことになるでしょうねえ」

村に帰って六法全書をしらべたところ、放送法第一条に、——この法律は、日本放送協会が発する電波が日本全国津々浦々まで行きわたることを目的にして制定する——という旨が書いてあった。

二度目の交渉でも成果が得られず、帰りがけに「それでは聴視料を払わないから、裁判にかけてもらいましよう。公判でやってもらえば、NHKの方が第一条違反だということがわかって面白いから——」という、「まあ待ってくれ」といって引き留められ、結局NHK全額負担で、県内でも早いうちに栄村にはサテライト局ができたのである。「他へは話すな」といわれたが、三〇年もたてば時効というものだろう。

豪雪地帯の暗い感情は今も尽きない。雪下しが楽なようにと、基礎コンを高くして（二m）、その上に二階建ての家をたてたら、三階建てと判定され、各種税金が三階建てなみにとられるという。止むを得ずやったのに、これは暗い感情だという。しかし、栄村の人々の学習力をもってすれば、いずれ改正さすことができるだろう。昔から栄村は、そうやって一つ一つ乗り越えてきたのだから——。

(3) 昭和三〇年代、長野市更北地区や、佐久市中込地区で、農文協会員達による農業近代化の火の手が上がった。

当時、革新政党はまだ『貧乏革命論』に立っていて『低米価政策を中心とする低農産物価格政策によって、農民は最早食っていけないところまできている』、という主張を繰り返していたが、実態は、農地改革によって重い小作料から解放された経済的なゆとりと、自作農民になった精神的な喜びに支えられ、ようやく下からの近代化、

農民路線の近代化の芽が出はじめ、比較的恵まれた善光寺平や佐久平の一角で火の手が上がった。

私達は長野県農業近代化協議会（農近協）などという勝手な名前をつけ、『近代化を妨げるものは何人たりとも許さないぞ!!』などと喚き散らし、『近代化の火の手が上がっている現場に集まれ!!』、農民移動大学の始まりだ!!』などと氣勢を上げ始めた。

行政主導型の、上からの近代化路線を歩んできた日本の農業に、初めて農民路線の近代化要求、下から沸き上がるような近代化の波が立ち始めた。この動きは、革新政党からは『富農的偏向』と言われ、保守系からは『近代化の鬼子』と訝かられ、孤立無援の、それ故にかえって燃え上がる、いわば疾風怒濤の勢いがあった。

これは十年にもみたくない期間であった。  
昭和三十六年の農業基本法、三十七年から始まる農業構造改善事業という膨大な国家予算を投入しての近代化政策の波に呑みこまれてしまうのだが、当時の青年、今60代後半から70代を生きている高齢者の血の中に、あの数年間の精神的体験は残っているものと思う。（私はこれを我がシュトルム・ウント・ドラングと位置付けている）

キャリアアスクールはこの人達をかなり強く意識する。八方塞がりな現状を、再び自分達の力で打破しようとする最後の機会にしたいと思うからである。

(4) 以上は（社）農文協の運動、主として農村青年通信講座の購読者（農文協会員といわれた）との関わりの中で筆者が体験したところを述べたものであるが、この通信講座は昭和三十四年、通巻第123

何年かして彼にも転任の話がもち上がった。

「やっと役に立つようになれば転任だ。辺地を馬鹿にしている」

「そんなら転任させない方法だ」

長野へ帰る私に、県の農業改良課（現農業技術課）にいったって、関普及員を転任させないように陳情するという役割が課せられた。時の課長竹松俊雄氏に話すと、

「引き留められるのは普及員冥利につきる話しだ。しかし本人の意思を無視すると人権問題になりかねない。本人はどうか」

「本人は納得している」

それならというので、関普及員の栄村駐在は延長されることになった。何年かたって、彼は箕作区の島田家に望まれて養子に入った。あれから三〇年たって、この頃、ある大きな集会で、島田普及員の「栄村の風土と村おこし」という報告講演をきいた。ピカピカッと光っていて、群を抜いているのであった。彼は生まれかわるとしたら、場所は栄村、職は普及員を選ぶに違いない、と思った。天職と適職が見事に一致している数少ない人だ、と思った。栄村の風土が、栄村の人々が、人一人をしっかりと育て上げたのだと思った。

**雪で半年使えない耕耘機**

三〇年代の初め、栄村にもガールデントラクターが入ってきた。やがて税金納付書がきてみんな暗い感情になった。

「半年雪の下で、全く使えないのに、どこも一律に七〇〇円というのはおかしい」

「それなら三五〇円にまけさせる方法だ」

「どこへ交渉に行くのか」

「ナンバーに栄村って書いてあるから役場だろう」

役場へ交渉にいったら係の人が、

「わしも村の人間だから、半年使えないことはわかっているが、トラクターには輪があって、雪のない土地へもって行って使うことだってできる道理だ」

「ああそうか。そういう疑いならナンバーをはずして、役場へ預けたらどうなる」

何とも珍妙な問答であった。しかしどこでどうなったのか、私には一切わからなかったが、タイミングよく、税金は半額になってしまった。そればかりではない。三〇年代後半になって、マイカーが入るようになったが、トラクターの前例があって、自動車税も半分に近い額に決定したのである。

**映らないテレビに聴視料**

これも三〇年代中頃、栄村にもテレビが入った。

「筋ばかりしか映らないのに、聴視料は一人前だというのだから馬鹿にしてる」

「サテライト局というものを作ってもらえば映るはずだ」

「そんならNHKにいったって交渉しよう」

NHKでは半額地元負担でないと作れないという。まだ映ったのを見たことがないのだし、第一テレビも買ってないのに半額負担とあったって、とても無理で、いつになるかわからない。何とか全額NHK負担でやってくれというのだが、規則は曲げられないという。

「それでは、今ある分は料金払わんでいいんだね」

「いやそれは、テレビを買うと同時に日本放送協会と聴視契約を結んだことになりましたので、払ってもらわないと困ります」

「払わなければ裁判になりますか」

今日起こっている町村合併問題についても、栄村は独自路線を歩み、全国的な注目を集めているが、今は高齢者になっている、かつての学習集団の精神的な支えも、高橋村長の自信になっているのではないか、と思われる。

当時30歳前後の青年だった私もまた、そこから多くのことを学び、今の、学習や技術についての考え方の基礎をそこから与えられたと思っている。

【参考】……………へ八十二銀行経済研究所・経済月報 所載

### 県境の村——栄村に学ぶ

玉井 袈裟男

深い雪——雪は固形の蒸溜水 見テミ

高齢化——年寄りのは村の宝物 見テミ

進む過疎——過疎は余裕の空間さ 見テミ

どん詰り——廻れ右すりゃ先頭さ 見テミ

さあさ やらずい 村づくり

人は活きいき 栄村

見てみ、と人々はいう。過疎で空いた家を利用して、「ふる里の家」(今泉地区)が作られた。都市と農村の、人間交流の場にしたという趣旨に共鳴した人々が、家族づれでやってきた。質の高い情報をもった人々が、年間延べで一〇〇〇人もやってきた。人は情報、情報は酸素だといわれる。酸素は人々を活性化させる。

ふる里料理にお声がかかる。あんぼ(やきもち)作りは婦人の領

分だ。ペット愛好家との交流から「ネコツグラ」作りが始まる。ワラ細工は老人の独壇場だ。雪の栄村ツアーがやってくる。青倉では「道祖神交流会」、横倉では「雪上運動会」が行われた。

上越新幹線が開通して、東京へ二時間半。県内どこよりも東京に近くなった。秋山郷にも陽が当たる。廻れ右してみたら先頭になった。暗い感情は学習の元手

これは前回にも書いた言葉だが、これを私に教えてくれたのは下水内郡栄村の人達であった。私が初めて栄村を訪れたのは昭和三十一年。当時栄村には高橋彦芳さんという優れた公民館主事がいて、実によく地域学習の世話をしていた。農民研という仲間もその一つであった。雪国の人特有の律儀さで、月に一度の学習会は欠かすことなく続けられていた。高橋さんから呼び出されて、私も何回か通った。

#### 国境警備の人事

あるとき、新任の農業改良普及員をめぐってこんな話がでた。

「辺地というものは、何から何まで端へよせられる。普及員でも先生でも、卒業したての、役にも立たねえヒヨコが、国境警備にいかといわれてまわされてくる。馬鹿にしてる。」

「役に立たなかつたら役に立つように育てるといふもんだ。垢がついていないから、白いカンバスに絵をかくようなもんで、かえって育て易いはずだ。」

新任の普及員、関力さんは次回から毎月の学習会の常連になった。仲間からいろいろな注文がだされ、彼はとてもよくいうことをきいて走り廻ったから、だんだん役に立つ普及員になっていった。教えるより、教えてもらう。これが彼の姿勢だった。

った。

なにしろ、敗戦後二年一寸しかたっていない時期だった。八木氏の言葉は妙に説得力があった。

私は(社)農文協の青年学習運動に参加することになった。昼間は学校の教師、夜は地域の学習運動に、という生活パターンができて上がっていった。

折から公的社会教育機関として公民館が設立され、農業経営や技術の教育機関として農業改良普及所が設置され、行政による教育指導体制がととのえられた。これらは行政による上からの公的教育活動であり、(社)農文協は民間による下からの学習運動というふう

に、初めから教育と学習の違いが強く意識されていたのであった。筆者が初めて地域の青年学習集団と接触を持ったのは昭和二十四、二十五年頃、場所は下水内郡太田村(現飯山市太田地区)という雪深い水田単作地帯であった。

戦後の混乱の中で、農地改革が行われ、下水内中部四ヶ村土地改良事業という大事業が始まり、(社)農文協が出していた農村青年通信講座の購読者集団(農文協会員といった)がそれに深く関わり、先鋭的な実力者集団として活動する様子を、私は現地に於いて学んだ。

東大農学部の川田信一郎氏(当時助教)が、生産や生活上のすべての停滞原因を豪雪のせいにして終わりがちな現地の青年達に対し、『雪に泣くものは雪を生かせ』と言い、『雪一作』という考え方を説いた。

(これは昭和十六年に出版された諏訪中学教諭三沢勝衛先生の『風土産業論』の中の考え方に依ったものと思われる。)

あれから半世紀以上を経て、ウィンタースポーツばかりでなく、グリーンツーリズムの先進地として、飯山市太田地区は全国から人を集めているが、それは青年期の私にも多くのことを学ばせてくれた農文協会員達の努力に依るところが大きい。

しかも、その当時の人々は今も高齢者学習集団を維持しており、無言のうちに私にキャリアアスクールの必要性を説きかけているのである。

(2) 引き続き、昭和三〇年(一九五五)ごろからは更に北の、日本一の豪雪地帯といわれる下水内郡栄村の農文協会員達による学習会に足をのぼすことが多くなった。豪雪地帯がもつあらゆる問題に対し、一つ、また一つ、確実に突破していく青年達の実践力や、発想の豊かさは目をみはるものがあった。

農民路線の問題解決法を私はここで学んだ。

(本項末に挿入する『県境の村——栄村に学ぶ』参照)

今日、栄村は高橋彦芳村長を擁し、農業構造改善事業も、観光開発も、道路行政も、高齢者福祉も自力でなし遂げていく。小さな村ながら強大な自治能力を持つ村として、県下はもちろん、全国的な注目を集めている。

昭和三〇年当時、高橋氏は公民館主事として社会教育の担当者であったが、同時に下から燃え上がるような農文協会員達に依る自主学習会の世話役として、そこから多くのことを学ばれたと思う。

(注・当時県下の公民館職員の中には自主的な農文協会員達の学習運動を避ける人達と、受け入れる人達の別が判然としていて、前者の方が圧倒的に多かった。)

## キャリアアスクール（仮称）

### 発想の経緯と構想

玉井 袈裟男

#### 第一章 キャリアアスクール（仮称）発想に至るまでの経緯

（試案・キャリアアスクール）を書こうとすると、長野県老人大学（以下県老大）の創立について語らなければならず（昭和五十二、五十三年）、県老大について語ろうとすればその前駆的試みである（財団法人・長野県農村文化協会による梅池老人大学（昭和四十五年）について語らなければならぬ。梅池老大について語ろうとすれば昭和三〇年代の信濃生産大学について、そして、そしてその先駆となった長野県農業近代化協議会に、更にその母体となった農民移動大学について語らなければならぬ）。

そうなれば、（社団法人）長野県農村文化協会による農村青年学習運動について語らなければならない。

このように考えると、筆者の大学卒業（昭和二十三年）、就職（同年信州大学）以来の全人生について語らなければならなくなってしまう。

いま、全速で巻き戻したテープを、今度はややゆっくりと順送りに再生してみることにしよう。

(1) 昭和二十三年（社団法人）長野県農村文化協会が再建されたが、その中心人物は常務理事の八木林二氏であった。八木氏は東大文学部出身の大阪人で33歳、陸軍大尉であり、私は長野県の農民出身、九大農学部卒、陸軍砲兵二等兵23歳であった。八木氏はクリスチャンで紳士、私は無神論者を気取る生意気盛りの山出しであった。

戦後の混乱の中で、活発になりかけていた青年団活動の一環として行われた公開討論会において、一聴衆であった私が、講師であった八木氏に噛みついたのが発端であった。（昭和二十三年三月、場所は須坂市の上高井農学校講堂であった）

青年団活動と仕事の両立のむずかしさを訴える青年達に対し、八木氏は『運動には多少の犠牲がともなうもので、それは覚悟しなければならぬ』、と言われた。私はそれに反撥した。『たとえ運動のために生命を落とすようなことがあったとしても、それを他者の犠牲になったなどと考えるはならない。それはあくまで自分の存念によってなしたことから——』、というのが私の主張だった。

噛み合わない議論の果てに、

『私は私の考えでいく。君は君の考えで農村青年の学習運動に参加してほしい。それが民主主義の行き方だと思う』、と八木氏はい

# キャリアスクール（仮称） 発想の経緯と構想

玉井 袈裟男

## 目次

- 第一章 キャリアスクール（仮称）発想に至るまでの経緯
- 第二章 キャリアスクール（仮称）の構想について
- 第三章 キャリアスクールは地域に根ざす学習会
- 第四章 あとがきに代えて